

『玉勝間』卷九「石見国なるしづの岩屋」について

膽 吹 覚

一、志都の岩屋

生石村主真人歌一首

大汝少彦名乃将座志都乃石室者幾代将経^{オホニサスヲヒコノイナシムシツノイハヤハイトヨヘヨラム}

この一首は『万葉集』卷三雑歌に収録されている。その大意は、大国主神と少彦名神が住んで居られたという志都の岩屋は、神代の昔から幾代を経たことだろう、といったところである。この歌に詠まれた志都の岩屋の所在については、島根県大田市静間町の海岸の岩窟や同県邑智郡瑞穂町岩屋にある弥山の麓の大岩窟や、同所の志都岩屋神社な

どが、その候補して挙げられているが、現在のところ定説を見るには至っていないようである。³

この志都の岩屋については、近世に於いても少なからず考証されていた。

まず近世の字書類を見てみると、寺島良安『和漢三才図会』卷七十七「播磨国」（正徳三年（一七一三）成）に、次のような記事が載る。

静窟^{シヅイナヤ}。在印南郡生石村。姫路與加古之間山。祭神二座。大己貴命少彦名命。神主二人。神号称生石子大明神。神殿号石宝殿。【天女用石所造也】其高二丈六尺、経営甚奇而非可人力致者。³

『和漢三才図会』は、志都の岩屋（静窟）は播磨国印南郡生石村の石の宝殿であり、そこには大国主神と少名彦神の二柱が祀られていると記している。

次に、国学者による『万葉集』研究を見ると、契沖は『万葉代匠記』第二巻（初稿本）に「しつのいはや、いつくともしれず。此二神いはやにましけるといふ事、しるせる事なし。風土記などには見えけるにや。」と記しており、彼は未詳としていたようである。これに対して、賀茂真淵は『万葉考』巻十四に、次のように記している。

此石室は出雲にやあらんと思へど、風土記にしつのいはやてふは見えず、景行天皇御幸ありし時、周防国の神夏磯姫、磯津山の賢木に紐・鏡をつけて参りし事紀に在、且御国に見師どもの石窟の多かりし事も同紀に見ゆれば、磯津山に此二神のませし石室もあるをよめるにや、かの賢木をとりしも殊に貴き荒山なるへければ、よし在于聞ゆ³

真淵は、志都の岩屋は出雲国にあったのではないかと推測するが、『出雲国風土記』にその記述が見られないので

断定は避けている。そして、真淵の門人、本居宣長はこの問題について『万葉集玉の小琴』巻三（安永八年へ一七七九）成に、次のように記している。

皮為酢寸云々

此歌は、下【卅三丁】生石村主真人歌に、大汝、小彦名乃、将座、志都乃石室者、幾代将経（三三五）といふ歌と、上の句の入ちがひたるにて、紀国の三穗石室に座せしは、大汝少彦名神、播磨国の志都石室に座せしは、久米若子也、其故は、日本紀に、弘計天皇、更名来目稚子と見え、又此御兄弟播磨国に隠れいましし事も見えたれば也、又かの歌の作者の姓の生石は、播磨の地名と聞えたり、かの志都石室を今生石子と称すと也、さて億計天皇更名大石尊、又大為大脚などあるも、生石と一ツにて、播磨に坐し時、其国の地名をとれる御名と聞えたり、

「皮為酢寸」の歌は、前掲の「大汝」の歌と同じく『万葉集』巻三に掲載されている。その歌を左に引く。

博通法師往紀伊国見三穗石室作歌三首

ハタスヌスナノワカゴガイアジケルミホノイハヤハヒレドアカスガ
皮為酢寸久米能若子我伊座家留三種乃石室者雖見不飽
鳴（さ）

宣長は、まず「皮為酢寸」の歌の上句と「大汝」の歌の上句が入れ違いになっているのではないかという仮説を立てる。その上で、彼は紀国の三種の石室に座していたのは大國主命と少彦名命で、播磨国の志都の石室に座していたのは久米若子（顕宗天皇）であるという。ただし、宣長は『古事記伝』巻四十に、

或説に、此志都石室は今播磨国にある石之宝殿と云物にて、其前に社ありて、生石（う）子と云と云り、此説に就て己（おの）さきに思へるは、かの三種石室の歌と、此志都石室の歌と互に末句の入粉（う）ひたるにて、久米若子の坐しは播磨の志都石室なるべし、生石（う）子と云も御兄王の大石（お）てふ御名に由ありと思へりしは非にぞありける、かの石宝殿と云物を志都石室なりと云ふもとより非なり、彼は人の入居るべき物のさまにはあらず、

と記し、『和漢三才図会』が説く播磨国の石の宝殿は、人

『玉勝間』巻九「石見国なるしづの岩屋」について

間が入居できるものではないので、この石の宝殿は久米若子（顕宗天皇）が座した志都の岩屋ではないとの判断を示している。

このように宣長以前の近世に於いても、『万葉集』に詠まれた志都の岩屋の所在については現在と同じように諸説があり、定説を見るには至っていなかったようである。

二、『玉勝間』巻九

「石見国なるしづの岩屋」

宣長の随筆集である『玉勝間』巻九（寛政十一年（一七九九）刊）に「石見国なるしづの岩屋」と題する随筆が掲載されているので、それを左に引用する。

石見国なるしづの岩屋

石見国（い）邑知郡岩屋村といふに、いと大きな岩屋あり、里人しづの岩屋といふ、出雲備後のさかひに近きところにて、浜田より廿里あまり東の方、いと山深き所にて、濱田の主の領す地なり、此岩屋、高さ卅五六間もある大岩屋也、又その近きほとりにも、大きなちひ

さき岩屋あまた有、いにしへ大穴牟遲少彦名二神の、かくれ給ひし岩屋也と、むかしより、里人語りつたへたり、さていにしへは、やがて此岩屋を祭りしに、その外に別に社をたてて祭る、志津權現と申すとぞ、此事、かの国の小篠御野がもとより、たゞにかの里人に逢て、くはしくとひきゝつる也とて、いひおこせたるなり、万葉集三の巻なる歌の、志都の石室は、これならむかとも思へど、なほ思ふに、万葉なるはいかゞあらむ、かの歌のよみぬし、生石村主真人といふ人、もし石見国の官人などにて、かの国に在て、ゆきてよめらむはしらず、さもあらざらむには、かの国は他国人のゆくことまれなるに、殊にさばかり山ふかきおくどころならむには、よの人のしりてよむべきものともおほえず、されど後の世の人の、つくりていふべきところとおほえねば、かならずふるきよしありて、たゞならぬところとはきこえたり、

石見国邑知郡岩屋村（現在の島根県邑智郡邑南町）に大きな岩屋があり、その里の人々はこの岩屋を「しづの岩屋」

と呼んでいた。この岩屋は出雲国と備後国の国境近くにあつて、浜田から八十キロメートルほど東行した、たいへん山深いところで、そこは浜田藩の領地であつた。この岩屋は高さ約七十メートルもある大岩屋で、またその付近には大小の岩屋が多くあり、古代に大穴牟遲神と少彦名神の二柱の神が亡くなられた場所であると言ひ伝えられている。この二柱の神々の死後、やがてこの岩屋を祀るようになったが、中昔の頃から岩屋の外に別に社を建てて祀り、それを志津權現と称しているという。この話は、石見国の小篠敏（御野）からもたらされたもので、敏が岩屋村の村人に直接に會つて詳しく話を聞いたものである。さて、『万葉集』巻三収載歌に見える志都の岩屋はこれではないかと思つたが、よく考えて見ると、それはどうであらうか、いささか不審である。志都の石室の歌を詠んだ生石村主真人が石見国の官吏でもない限り、石見国は他国の人が行くことは稀で、しかもこの岩屋は山深いところにあるので、世間の人がこの地を知つていて詠んだとは考え難い。しかし、後世の人が拵えたとも思えないので、必ず古いが謂われがあつて、尋常ではないところと思われる、と宣長は記している。

すなわち、石見国岩屋村にある志都の岩屋が『万葉集』に詠まれた志都の岩屋ではないかという敏の提言について、宣長はそれには不審な点があるとして、慎重な姿勢を示している。前章で述べたとおり宣長は、志都の岩屋は播磨国にあり、そこに座していたのは久米若子であったとの見解を示していたので、小篠敏からの情報に対して、宣長は慎重な姿勢を示したのであろう。

宣長に石見国の志都の岩屋に関する情報をもたらした小篠敏は、石見国浜田藩の儒学者であったが、国学にも興味を持ち、安永九年（一七八〇）に鈴屋に入門した人である。⁷宣長が小篠敏から志都の岩屋についての情報を得ていたことは、敏が鈴屋に入門する二年前の安永七年（一七七八）九月十九日付の荒木田尚賢宛の書簡に、次のように記されていることから知られるところである。

一、小篠氏より参候紙包並書状御届被下、御世話忝奉存候、石見静窟ノ図御見せ被下辱、此度返上仕候、此岩屋之事、先達而段々小篠氏より申参り承候処、いかさま故ある所とは聞え候へ共、万葉に有之候しつノ石室ハ、やはり播磨なるべく奉存候也

『玉勝間』巻九「石見国なるしづの岩屋」について

尚賢は伊勢国宇治今在家に生まれた人で、谷川士清や賀茂淵に師事した後、天明七年（一七八七）に鈴屋に入門している。この書簡で宣長は、まず小篠敏から尚賢に送られた紙包みと書状を宣長に届けてくれたことへのお礼を述べ、次に「石見静窟ノ図」を見せてくれたことに重ねてお礼を述べている。そして、『万葉集』にある志都の岩屋は、やはり播磨国にあると思う、との私見を述べている。

本居宣長記念館には、石見国の静窟を描いた絵図二枚（図1・図2）が所蔵されている。この二枚がともに前掲の尚賢宛の書簡に記された「石見静窟ノ図」であるか、或いはいずれか一枚だけがそれであるかは、判断することが難しい。しかし、この二枚の絵図（或いはその一枚のみ）が、尚賢の書簡に記された「石見静窟ノ図」の写しであろうと推測してほぼ間違いまいであろう。すなわち、本居宣長記念館所蔵のこの二枚の絵図（或いはいずれか一枚）は、小篠敏——荒木田尚賢——本居宣長という経路で伝わったものと考えられる。なお、この二枚の絵図といっしょに小篠敏自筆の書状一通が同封されているが、その書状には志都の岩屋に関する記述はない。



図1 「石州邑知郡岩屋村静寂図」(本居宣長記念館所蔵)

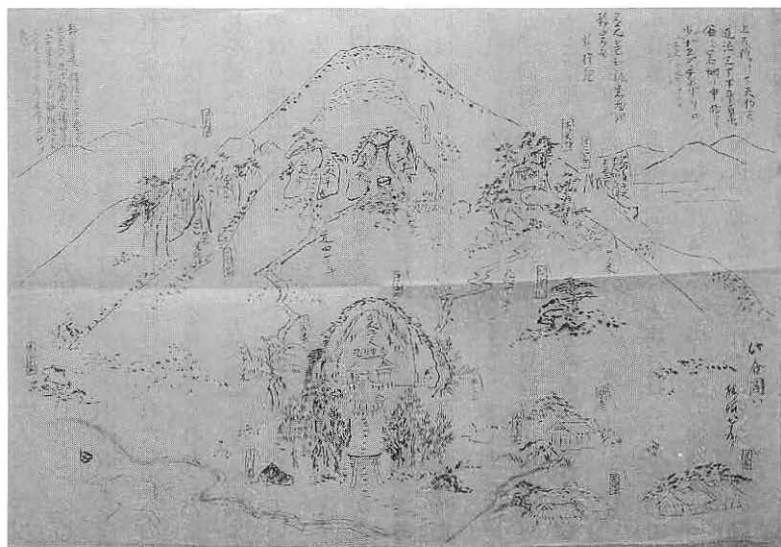


図2 「石見邑知郡岩屋村静寂図」(本居宣長記念館所蔵)

図1はその中央下部に「石州邑知郡岩屋村静窟図」と記されている。絵の右下部、石段を上ったところに鳥居が見える。鳥居の傍らには「此沖村里人家有、石見ニテハコノサキト云事ヲ沖トイフ」と記されている。鳥居の右には谷川の流れが描かれており（青色）、川岸には「聖屋敷^{ヒョウ}」とある。この鳥居の奥には、社殿らしき建物と巨大な「鏡岩」が描かれている。「鏡岩」の側には「高二丈五尺、横二丈五尺」、その右上には「鏡岩ヨリ峯岩屋マテ三丁登」と細字で書かれている。「鏡岩」の上部、絵の中央上部に見えるのが、「静窟」（志都の岩屋）である。その下には「此内二十五人程——（雨宿り成）が略されたか、膽吹注）」とある。「静窟」の右上にも岩屋が描かれており、そこには「下モ岩屋、高二丈、此下三十人程雨宿り成」と記されている。さらにその右、絵の右上隅には「向ヒ岩」があり、二つの切り立った岩の間に「間二尺五寸」、岩の左側に「高サ一丈余」と書かれている。さて、再び「静窟」に戻ると、その左には「奥静窟」がある。その注記には「此内二十人斗——（雨宿り成）が略されたか、膽吹注）」とある。「奥静窟」の左、絵の左上部には「上岩屋」が描かれ

【玉勝間】巻九「石見国なるしづの岩屋」について

ており、「高サ五丈」と記されている。絵の上部、「奥静窟」の上には「上岩屋ヨリ下岩屋マテ此間三丁」とある。また、この「上岩屋」から中央下部に向かって一筋の谷川が、そして、「奥静窟」の麓からももう一筋の流れが描かれており、この二本の流れは絵の中央下部で合流している。以上が図1の構図とその概要である。

図2は絵の上部に「石見邑知郡岩屋村静岩屋静権現」と記されており、志都の岩屋と志津権現を中心に描いたものであることが知られる。この絵図は図1と比較してやや詳しく丁寧に描かれている。絵の左上隅に「静ノ岩屋、備後ヘモ安芸ヘモ出雲ヘモ近キ処ノ由也、浜田ヨリハ二十里余アルヨシ、静権現ト云、大已貴命少彦名命ニ神ヲ祭ル」とあり、絵の右上部には「上天狗ヨリ下天狗迄道法三丁半斗、真中二俗二岩棚ト申物アリ、少シ小エゴニテゴザソロ、石見ニテハ谷ノアサキヲエゴト云」と記されている。絵の中央部に大きく描かれているのが「カミミ岩」で「式丈五尺」と注記されている。その下には「志津権現」の本殿と拝殿らしき建物が、更には石段と鳥居が描かれている。「カミミ岩」から左右に道が伸びている。右手の道を「四丁斗」

登ると「下モ天狗」に至る。左手の道を「四丁斗」進み、三叉路を右へ行くと「イハタナ」である。この「イハタナ」の中の大きな岩屋が、図1の「静窟」にあたり、その左手のそれより小ぶりの岩屋が図1の「奥静窟」にあたると考えられる。そして、「イハタナ」のある山の尾根を隔てて左に「上天狗」の岩屋が描かれている。

なお、『玉勝間』の「石見国なるしづの岩屋」には、この二枚の絵図は掲載されておらず、また、その文章にはこの二枚の絵図に関する言及も見られない。

三、『閑田耕筆』に記された志都の岩屋

志都の岩屋については、伴蒿蹊『閑田耕筆』（享和元年〔一八〇一〕年刊）巻一にも、次のような記事が収録されている。

万葉集に「おほなむちすくな彦なの作けん静シヅの巖屋イハヤは見れどあかぬかも。とあるしづのいはや、いつかたともしられず。あるひは播磨の石宝殿をそれなりといふは非なること論なし。然るに近年小篠道冲といふ人、

石見国浜田侯の臣にて、京師逗留の日話せられし趣を伝きくに、其国オウチ邑知郡シヅノイハヤに静窟といふもの有り。ゆゑに其郷を岩屋村と号す。鏡岩といふものゝ下に小社ありて、静権現と称す。侯命によりて社を開くに、内に物なく、棟簡ムナヅナに少彦名スサノヒコナノ神と書るのみ。且元禄年間に書る文章あり。其意は里人少彦名神といひならはせども、社中物なき故に、一旦薬師仏の鑄像の、土中より掘出せしを安置せしに、其鑄像を虫喰ける。いとあるまじきことなれば、神慮カミコに慚なげざることを思ひて、取除トルてもとの空社となしたる趣なり。此文、真名にて甚拙きものなれば、今不孝所の絵図はこゝに出す。かゝる旧地も時有て顕るゝは、文明の化なりけり。

伴蒿蹊は京都の人で、宣長とほぼ同時代に活躍した人である。彼は近世後期の歌人として、また、『近世畸人伝』や『閑田文章』などの作者（文章家）としても知られている。右の文章に拠ると、蒿蹊は小篠敏から直接に話を聞いたのではなく、敏が京都滞在中に語ったことを人伝に聞き、それを『閑田耕筆』に記した、と断っている。

蒿蹊が伝え聞いたところによると、石見国邑智郡に静窟シヤクというものがあり、それに因んでその村は岩屋村と呼ばれている。岩屋村には鏡岩という岩があり、その下に小さな社があり、静権現と称しているという。浜田藩公の命によってこの社を開いたところ、その中は空で、棟簡に少彦名神と書かれていただけであった。元禄年間に書かれた文章には、里人はこの社の祭神を少彦名神と言慣わしてきたが、社の中には何もないので、一時、土中から掘り出した薬師如来像を安置していたが、その仏像が虫に喰われてしまった。里人は、これはあってはならないことなので、神慮にかなわないことと思って、この仏像を取り除き、社の中を元通りの空っぽにしたということが、その文章に書かれていた。この文章は漢字で書かれていたが、たいへん拙い文章なので、ここには掲出しませんが、石見国の静窟の絵図を掲載する(図3)。静窟のような旧跡が時を経て世に知られるようになったことは、文明が開けた結果といえるだろう。以上が『閑田耕筆』の記すところである。

『閑田耕筆』に「絵図はこゝに出す」とあるとおり、同書には「石見国邑知郡岩屋村静窟図」(図3)と題する絵

『玉勝間』巻九「石見国なるしづの岩屋」について

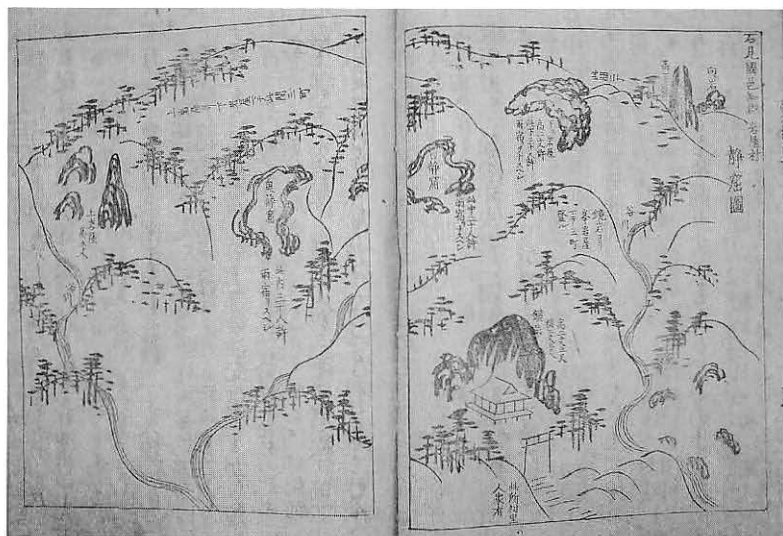


図3 『閑田耕筆』巻一「石見国邑智郡岩屋村静窟図」(福井大学総合図書館本)

図一枚が掲載されている。この絵図もまた、小篠道冲（小篠敏）——某氏——蒿蹊という経路で、敏から間接的に蒿蹊に伝えられたと考えられる。なお、敏と蒿蹊とを仲介した人物（某氏）は、『万葉集』に歌われた志都の岩屋に興味関心を持つような人で、後にこの時の話を蒿蹊に伝えていることから考えると、蒿蹊と交友関係にあった国学者ではなかったかと推測される。

さて、図3の構図を見ると、絵の中央下部に「鏡岩」があり、その前に社殿らしき建物と鳥居、そして石段が描かれている。「鏡岩」の上部には「静窟」が、その左には「奥静窟」が描かれている。「奥静窟」の左、絵の左上部には「上岩屋」が、「静窟」の右には「下モ岩屋」、更にその右手、絵の右上隅には「向ヒ岩」がある。こうした岩の配置は図1と同じである。また、谷川も絵の右上部から下に向かって一本、そして、絵の中央部から左手に向かって流れる一筋と絵の左手から中央部に向かって流れる流れとが、絵の中央下部で合流している。こうした谷川の描かれ方も図1と同じである。

絵図に書き込まれた注記を比較すると、「鏡岩」は図1

が「高二丈五尺、横二丈五尺」、図3も「高二丈五尺、横二丈五尺」。鳥居下の注記は図1が「此沖村里人家有、石見ニテハコノサキトイフ事ヲ沖ト云」、図3が「此所村里人家有」。「静窟」は図1が「此内二十人程」（「雨宿り成」が略されたか、膽吹注）、「図3が「此中二十人許雨宿リナスベシ」。「鏡岩」の上部の注記は図1が「鏡岩ヨリ峯岩屋マテ三丁登」、図3が「鏡岩ヨリ峯岩屋マテ三町登ル」。その上部、「下岩屋」は図1が「下モ岩屋、高二丈、此下三十程雨宿り成」、図3が「下モ岩屋、高二丈許、此下三十人許雨宿リヲナスベシ」。絵の右上隅の「向ヒ岩」は図1が「高サ一丈余、間二尺五寸」、図3も「高一丈余、間二尺五寸」。絵の中央部「奥静窟」は図1が「此内二十人斗」（「雨宿り成」が略されたか、膽吹注）、「図3は「此中三十人許雨宿リスベシ」。その山上には図1が「上岩屋ヨリ下岩屋マテ此間三丁」、図3も「上岩屋ヨリ下岩屋マテ此間三町」。絵の左上部の「上岩屋」は図1が「高サ五丈」、図3も「高五丈」とある。このように図1と図3の注記には若干の相違点も認められるが、概して言うならば、一致するところが多いといってよいだろう。なお、図

1と図3との目立った相違点を挙げるならば、図1には山の樹木が描かれていないが、図3にはそれがあるというところくらいである。

このように見て来ると、図3は図1に極めて近似した一枚であるといつてよいであろう。この結果から考えるならば、本居宣長記念館に所蔵されている図1と図2のうち、少なくとも図1は、小篠敏から荒木田尚賢を経て宣長に伝えられたものであると見てよいであろう。すなわち、図1と図3はともに小篠敏を起点として、左記の系統図のように枝分かれして成立したことが推測されるのである。

小篠敏

荒木田尚賢——本居宣長（図1）

京都の某氏（蒿蹊の知人友人の国学者か）

伴蒿蹊（図3）

小篠敏は、彼が出仕する浜田藩領内にある「静窟」が『万葉集』に詠まれた志津の岩屋であると考えていた。敏はこの自説を説くための資料として、自ら石見国の「静窟」を描いた絵図を作成したのではなかったらうか。しかし、

『玉勝間』巻九「石見国なるしづの岩屋」について

残念ながら、私が推測するところの敏自筆の「静窟」の絵図は、現在のところ、その存在は知られてはいないようである。なお、宣長は寛政五年（一七九三）と享和元年（一八〇一）の二度の上京の折に、蒿蹊宅を訪ねているが、この時に二人の間で志都の岩屋に関する議論が交わされたかどうかは、宣長の日記からは知ることはできない。

四、『翁草』の「石州静の窟屋」

神沢杜口『翁草』巻百五十二に「石州静の窟屋」と題する文章があるので、それを左に引用する。

石州浜田領内に、静シヅといへる所有り、其山中に巖窟多し、其中の殊更大なる窟屋イムヤに社有り。伝に曰、小名彦の御神を祭と云々。然るに今より百年前、此社を開く事有しに、中空虚なりしかば、或人薬師如来の銅像を納む。是医薬の縁にて習合シウガフせるならん。去れば此銅像夫より幾程もなく蝕けるを、見つけて不思議の事とし、神慮に叶はぬを懼れて其像を他へ移したり。今此社中に此よしを漢文にしたるを納む。其漢文は甚不文なれ

共意趣は此事なり。浜田侯の侍医和学に志す人の作なり。此静窟は万葉集によめり。

大なむちすくなみがみのつくりけん静がいはいは見えれどあかぬかも

此静のいはやは、はりまの石の宝殿なりと、かしこの縁記にいふは無稽の言なるべし。

神沢杜口は京都町奉行所与力を勤めたが、早くに隠遁して余生を著述に従った人である。彼は俳諧を好み、詩文を能くし、また国学の教養もあった。著作に『翁草』がある。杜口の「石州静の窟屋」と前掲の蒿蹊の文章とを比較すると、まず、志都の岩屋については、その所在地名は相違しているが——『翁草』は「静」とあり、『閑田耕筆』は岩屋村とする。——、石見国浜田領内に「静窟」或いは「静の岩窟」と呼ばれる岩窟があり、その岩窟には杜があった、曾てそこには少彦名神が祀られていたが、後にその社を開いたところ空だったので、そこに薬師如来を安置した。しかし、その後、それを撤去し、これまでの杜の経緯を記した極めて拙い文章を作って納めたことは、ほぼ一致して

いる。つまり、石見国にある志都の岩屋に関する情報は、この両書ほぼ共通しているといつてよいだろう。ただし、『閑田耕筆』には「石見国邑智郡岩屋村静窟図」一枚（図3）が添えられているが、『翁草』にはそれに相当する絵図はない。

杜口は石見国にある志都の岩屋に関する情報について、その情報源を明記していない。しかし、上述のような共通点が認められることから、それは蒿蹊と同じく小篠敏であったと見てよいのではないだろうか。宗政五十緒氏の研究に拠ると、蒿蹊と杜口の間には親交があり、蒿蹊の『近世畸人伝』の草稿を杜口が蒿蹊から借覧して写した可能性もあるという。⑩ そうであるならば、蒿蹊と杜口が、ともに小篠敏を情報源として、志都の岩屋に関する情報を共有し、それぞれが随筆を著したとしても、それは有り得であろう。杜口が直接に小篠敏から情報を得たのか、あるいは蒿蹊と同じく、敏の話を聞いた第三者から伝え聞いたのか、将又、杜口は蒿蹊から情報を得たのか、それは現在のところ私には不明であるが、江戸時代中期の京都に於いて、蒿蹊・杜口が構築した文化的なネットワークの中に、小篠敏が現わ

れて、石見国にある志都の岩屋について、自作の絵図を披露しながら解説した姿が、『閑田耕筆』と『翁草』から見えてくるのである。

むすび

本居宣長『玉勝間』巻九「石見国なるしづの岩屋」、伴蒿蹊『閑田耕筆』巻一の志都の岩屋に関する一篇、神沢杜口『翁草』巻百五十二「石州静の岩窟」の三篇は、それぞれ独立した随筆であるが、その一方で、この三篇は、小篠敏という一人の学者から発信された情報に基づいて書かれた、謂わば兄弟のような関係にもある。このことは、本居宣長記念館所蔵の図1と『閑田耕筆』掲載の絵図(図3)との近似、そして、『閑田耕筆』の記事内容と『翁草』のそれとの類似から知られるところである。

『玉勝間』巻九「石見国なるしづの岩屋」は、その一篇だけを読んで理解することも可能であるが、そこから更に一歩進めて、同時代に書かれた『閑田耕筆』巻一の志都の岩屋に関する一篇と『翁草』巻百五十二「石州静の岩窟」

と併せて読むことで、江戸時代中期の松坂と京都という空間的な広がりの中で読み解くことができる随筆である。こうした空間的な広がりの中で作品を読むことは、近世随筆がもつ楽しみの一つである。『玉勝間』の「石見国なるしづの岩屋」は、そうした読み方ができる随筆である。

註

(1) 『新編国歌大観』第二巻二十四頁、岩波書店、昭和五十九年三月刊。

(2) 現在の『万葉集』研究の主なものを見ると、新潮日本古典集成『万葉集』(新潮社、昭和五十一年刊)は「未詳。島根県大田市静間町の海岸の岩窟ほか、一、二の説がある。」とし、新編日本古典文学全集『万葉集』(小学館、平成六年刊)は「島根県大田市の真南約四十四キロメートル、広島県との県境に近い邑智郡瑞穂町岩屋にある弥山の麓の大岩窟か。志都岩屋神社という社もある。一説に大田市静間町海岸の岩窟かとする。」「新日本古典文学大系『万葉集』(岩波書店、平成十一年刊)は「志都の岩屋は所在不明。その洞窟に二神が住んだという伝説があったのであろうが、未詳。」と註釈している。

(3) 『和漢三才図会』、東京美術、昭和四十五年三月刊、下巻一〇八二頁。

(4) 『契沖全集』第二卷、岩波書店、昭和四十八年六月刊、二二八頁。

(5) 『賀茂真淵全集』第四卷、統群書類従完成会、昭和五十八年八月刊、二六三～二六四頁。

(6) 注(1)に同じ、二十二頁。

(7) 小篠敏の経歴については、中村幸彦「小篠敏伝攷(上)―賢愚同袋(八)―」(『国語国文』十三の十二、昭和十八年十二月刊)、加藤隆久「本居宣長と小篠御野」(『甲南大学文学会論集』三十二号、昭和四十一年十二月刊)、『本居宣長事典』(東京堂出版、平成十三年十二月刊)収載「小篠敏」(杉戸清彬氏担当)参照。

(8) 『日本随筆大成』第一期第十八卷、吉川弘文館、一七三

頁。

(9) 同右、第三期第二十三卷三一〇頁。

(10) 宗政五十緒「日本近世文苑の研究」収録「『近世畸人伝』の成立」参照、未来社、昭和五十二年十一月刊。

付記

本稿執筆に際して、資料の閲覧並びに本稿への掲載をお許し下さった本居宣長記念館と福井大学総合図書館にお礼申し上げます。また、本稿に於ける本居宣長の著作からの引用はすべて筑摩書房版『本居宣長全集』から引用した。

(福井大学准教授)